

アヤと土神

松本 聰美

ゆるゆると走っていたバスが、また止まった。

(やっぱり渋滞だ……)

アヤは、ひざのうえの大きな紙袋をかかえなおした。

中身は、さっき買った白いコート。

ふう、とためいきがでる。

ミクのいうとおりだった。

——ほらね、おねえちゃま。だから、ミクが早く帰りましょ、っていったのよ。日曜日は四時すぎると混むのよ。このまえも、そうだったでしょ。

ミクの声が聞こえるような気がする。

ミクはふたつ年下。四年生なのにいつも大人みたい

「正しい」。

立っている人のあいだから、向かいの席のミクとママが見える。何をしゃべっているんだろう。ふたりはとても楽しそう。じっと見ていたら、ママがこっちを向いた。

なあに、どうかしたの？——ほほえんだママの目がいつ

ている。ぱっちりした二重ふたえの目。参観日にはクラスの子が、「美人だね」っていつてくれるママ。アヤの低い鼻をぴくんと高くしてくれるママ。

なんでもないよ——アヤもクシャリと笑った。笑ってから、あっと思った。こんなふうに笑うと、ママはいつもいうんだ。「そうやって、鼻にしわをよせて笑わないの」。

そして、見本を見せるみたいに、ふわりとほほえんでみせる。妹のミクは、そんなママ、そっくりに笑う。二重のぱっちりした目で。

(いいんだ。一重ひとえだっていいんだ。わたしはわたし……)動き出したバスがトクンと止まって、かかえていた紙袋がアヤにかぶさるようにゆれた。

白いコートを買ったときのことが、また思い出された。もやもやと黒いものが、アヤの胸にひろがっていく。

「あした、パパ、新年ゴルフ会ですって。私たち女性三人